

第二部 だいにぶ 第二話 おみつば 於三葉のきつね

むかしむかし、北きた潟がたにある、ごんきち山やまのふもとに、「於三葉」というところがあったそうです。そこには、昔々、一団いちだんが住んでおりました。その親分おやぶんは、一番いちばんの年寄りとしよきつねで、一団いちだんをよくまとめておりました。

きつねたちは、夜よるになると村むらに出ては、えさあさりをしておりました。毎年まいとし、やみ夜よの大みそかになると、親分おやぶんきつねが、「コンコン、コンコン。」または、「ワイワイ、ワイワイ。」と鳴ないて、村むらじゆうをかけまわりました。

なんねん、何年なんねんも、その鳴き声なごえを聞いていたうちに、村人むらびとたちは、鳴き方なかたによって、その年としの吉きつきよう凶がわが分かるきことに気づききました。なんでも、「コンコン、コンコン。」と鳴くと、魚さかながとれなくなったり、農作物のうさくぶつのわるできが悪わるくなったりしました。「ワイワイ、ワイワイ。」と鳴くと、海うみには魚さかながわいて出て、大漁たいりようとな

り、また農家では、農作物がたくさんできました。

そういうわけで、村人たちは、親分きつねを神様のおつかいだと信じ、大みそかになると、親分きつねの声を聞くために、夜おそくまで起きていて、待っていたそうです。

ある日の夜、きつねの一人団は、えさを探しに、となりの山へ出かけました。いつものように、茂みにかくれながら行きました。でも、そこには、親分きつねの命をねらう『太五作』という、若者が住んでいました。太五作の家は、びんぼうで、おつ母が寝こんでいるのに、薬の一つも買ってやれないありさまでした。そこで、その日になって、親思いの太五作は、おつ母に言いました。

「おつ母、わしは、おつ母の薬を買うために、あの親分きつねを捕ってくる。あの毛皮は、高こう売れるだろうにの。」

しかし、おつ母は言いました。

「それだけは、したらあかん。神様のお使いといわれるきつね様に、そんなことをしたら、ばちが当たる。」

でも、おつ母の病気を治すことだけで頭がいつぱいの太五作は、猟銃を持って家を出ていきました。太五作は、木の上に登って、きつねたちが来るのをじつと待っていました。

しばらくすると、ガサガサ、ガサガサという音が聞こえて

きました。いました、いました、親分きつね。

ドキューン！ドサツ……。きつねが倒れました。

「やった。」

太五作は、大喜びです。すぐに、倒れたきつねの

ところへとんで行き、毛皮をはぎとりました。

よく日、その毛皮が、たいへん高い値段で

取りひき取引されることになりました。太五作が、親分きつねの毛皮を売り出していたところ、助べえという

北潟の人が、田中温泉へ、つかりに行つたそうです。助べえが、温泉に入ろうとすると、りっぱ



からだ
な 体をした 男が、先に 入っていました。鉄砲傷をいやしに 来て いるようでした。

「どこからおいでになりましたか。」

と、 助 べえが聞くと、 男 は言いました。

「わしか？わしは、 北 潟 の 於 三 葉 の 者 じゃが、さつき

てつぼうで 肩 をうたれたんじゃ。」

それから 後、 北 潟 の 村 では、 二 度 と 親 分 きつねを

見 る こと は あり ませ ん だ した。

もちろん、「コンコン、コンコン。」「ワイワイ、ワイワイ。」

という 吉 凶 の 知 らせ も だ す。

田 中 温 泉 に 来 て い た 男 は、あ の 親 分 きつね だ っ た

の だ け だ っ た じ ょ う か 。

